

今週の話題：

<ベネズエラ、カラカスで行われた回旋系状虫症（オンコセルカ症）についての第8回アメリカ会議からの報告>

1991年から毎年、アメリカ6カ国はアメリカ国家間会議（IACOs）を開催している。第8回会議（IACO '98）では、各国が1998年に行った治療についての報告を行った。アメリカ大陸各国では、多くの人々がアイバメクチン（Mectizan）によるオンコセルカ症の治療を受けた。その数は現在も各国で増加しており、1998年には270622人が治療を受け、これは1997年に比べると54656人（25.3%）の増加である（図1）。

ブラジル：1998年度には、治療対象者の66.9%に治療を行った。これで、累積治療率は84.6%となった。  
コロンビア：移住民の変動によって対象人数が代わるが、半年毎に治療が行われ、1回目では対象の88%、2回目には92.7%に治療が行われた。IACO '98では、Nacionalにおけるオンコセルカ症は根絶されたと考えている。

エクアドル：42のハイリスク地域を含む120の州すべてで、対象者の90.9%に治療が行われた。ハイリスク地域の人々に対しては年に2回治療が行われており、1998年も治療対象者の94%が2回の治療を受けた。エクアドルでもオンコセルカ症は撲滅されたと考えられる。

グアテマラ：362の村で対象の55.4%が治療を受けた。ここではSanta RosaとSan Vicente Pacayaの小さな地域で根絶されたと考えられる。

メキシコ：ハイリスクの村40を含む953の村において、対象者の96.3%に対して治療が行われた。

ベネズエラ：3456もの治療対象の村があるにも関わらず、撲滅に近い状況にまでなり、1998年の治療率は1997年に比べて、212%増加した。2000年には国内における治療を終える予定である。

編集後記：アメリカオンコセルカ症撲滅プログラム（OEPA）では、オンコセルカ症感染危険地域において、アイバメクチンを供給する。OEPA活動により、オンコセルカ症の診断や、罹患リスク人口の把握などが正確に行われるようになった。アイバメクチン治療は、成虫の伝播サイクルを絶つために繰り返し行わなければならない。OEPAを維持していく上で最も重要なのは各種の団体の参加であり、様々な組織が参加することによって、視野を広げ、資金や技術援助を増やし、コミュニケーションの場を広げることが必要である。

図1（p. 378）：南北アメリカにおいてアイバメクチンによる治療を受けた人数、1988年-1998年

図2（p. 379）：南北アメリカにおける回旋系状虫症-リスク人口の減少値、1995、1996、1999年（WER参照）

<世界の狂犬病についての調査、1997年>

第33回狂犬病調査が計169カ国で行われ、1997年の狂犬病の流行状況や治療法、ワクチン、診断法などについて報告された。

ヒトの死亡：世界中で、狂犬病による死亡者数は毎年35000人-50000人と推定されている。

アフリカ：狂犬病による死亡は、ほとんどが病院で確認され、主な病原はイヌ（40%）と考えられている。

アメリカ：1996年より減少して、114例の死亡が報告されており、コウモリが原因のひとつである。

アジア：33008人と世界で最も多く、そのほとんど（推定3万人）がインドである。

ヨーロッパ：死亡数は13例で、これは世界の死亡数の0.1%以下である。ほとんど（10例）がロシア連邦の報告である。

動物の死亡：

アフリカ：全部で 2344例報告されており、そのうち 57%がイヌ、29%が反芻動物である。

アメリカ：16486件で、これは世界の狂犬病の 49%であり、活発な流行を示している。イヌは 26%最も多い。またコウモリの感染が多い。

アジア：イヌの感染（90%）が最も多かった。地域で見るとフィリピンが最も多く、次がタイである。

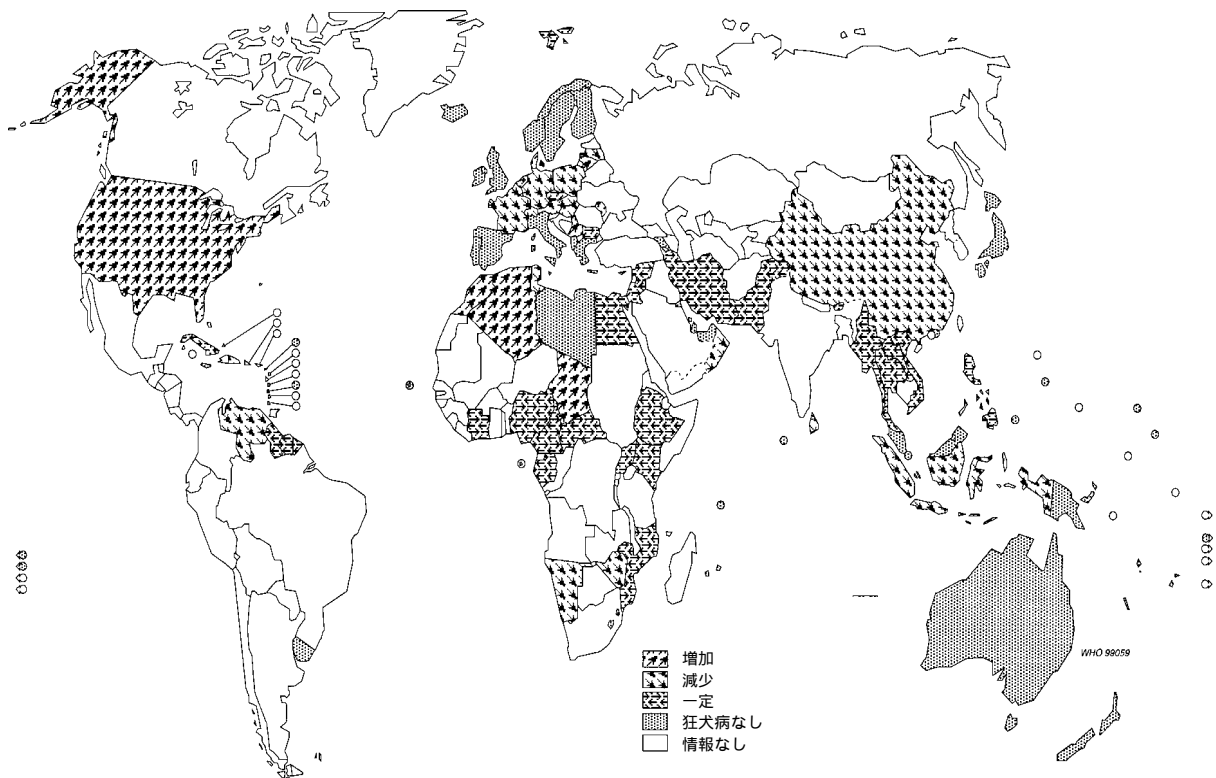
ヨーロッパ：全部で 5098 例報告されており、野生動物の感染が多い。地域では、ポーランドとロシアが多い。

ヒト狂犬病の発症後の治療：主にワクチン接種が用いられている（アフリカ：82% アジア：88% ヨーロッパ：80%）。

ワクチン：ヒトワクチンは 13カ国で、動物ワクチンは 25カ国で作られた。どちらも細胞培養によって作られたものが最も多く、他は神経組織や胎卵から作られたものであった。

病院及び動物病院における診断法：ヒト狂犬病も、動物の狂犬病も、蛍光抗体法による診断が最も多かった。多くの病院でより信頼性を高めるために複数の方法を用いて診断していた。

図1 狂犬病の動向 1997年



1997年における世界の狂犬病の流行状況が示されている。アメリカ合衆国では動物の狂犬病が多く、活発な流行がみられる。またアフリカの一部でも増加傾向にある。一方アジア、ヨーロッパでは前年と変わらないか、減少もしくは発症していない状態である。

### 流行ニュースの続報

#### インフルエンザ

1999年 10月、11月に、チェッコ共和国、フランス、ドイツ、日本、ノールウェーにおいて、インフルエンザウイルスの症例が報告された。詳細は、WER参照。

（堀 雅代、塩谷 英之、宇佐美眞）